

指揮者  
アンドレア・バッティストーニ× 佐藤真理子

ACT4編集長

コンサート形式で上演した「トゥーランドット」協力：東京フィルハーモニー交響楽団



ンドレア・ノセダにマスタークラスで、エンニオ・ニコトラにロシアで学びました。

**A**：そして二〇一〇年バルマのヴェルディ音楽祭での『アッティラ』で名前が知られるようになったのですね。

**B**：クラシック音楽の世界は広いようで狭いですからね。そこから急に声がかかるようになりました。

**オペラは毎晩、必ずハプニングが起こる**

**A**：スカラ座で『フィガロの結婚』を指揮した時は二十四歳で、これはスカラ座史上最年少ですね。やはりオペラの指揮が多いのですか？

**B**：オペラと交響曲の両方をやっていきたいですね。もしどちらか選べと言われたら、交響曲かもしれません。でもイタリア人なので、どうしてもオペラの仕事が多くて。

指揮は自分にとって天職だと思っています。リハーサルで楽団員と準備したり、どのような音楽を作るかという理想に向かって道を作る時そう感じますね。

**A**：ウィーン・フィルでは団員に

なる前に三年間はオペラの演奏ばかりするそうです。その後でやっとウィーン・フィルの正式な団員となってコンサートで演奏するようですね。

**B**：それはよく分かりますよ。オペラは毎晩必ずハプニングが起こる芸術ですから。歌手が調子を崩したり、テンポの問題が出たり、日によってそれぞれのテンションも異なります。色々なリスクに対応するというか、そういう意味で、歌劇場というのは最高の学校です。ここで三年間演奏したら、オーケストラのコンサートには全くの平常心で臨めるくらいの経験が積めますからね。

**A**：指揮者として大切なものは何だと考えていますか？

**B**：直観と情熱がすごく大事です。それに加えてオーケストラの楽団員をどうトレーニングし、技術を高めていくかも含めて、コミュニケーションが何よりも大切だと思います。そういう意味では東京フィルとの関係はともうまくいっていますね。

**日本での今までとこれから**

**A**：東京フィルの首席客演指揮者に就任して、東京での初のコ

ンサートが演奏会形式の『トゥーランドット』ですね。

**B**：日本とのご縁は二〇二二年の二期会『ナブッコ』が最初で、初訪日でした。その時に東京フィルハーモニーと初めて仕事をし、非常に柔軟というか、ヴェルディの音をすぐに出せることに驚いた記憶があります。今回の訪日中には、『トゥーランドット』とイタリアの作曲家の珍しい曲を取り上げます。九月には大好きなロシアの音楽を。ヴェルディがサンクトペテルブルク帝国歌劇場に書いたオペラ『運命の力』序曲、そしてサントリールホール定期公演ではレスピーギ編曲ラフマニノフ『五つの絵画的練習曲』、東京オペラシティでは反町恭平氏のピアノでラフマニノフの『バガニニの主題による狂詩曲』をやります。どちらの公演も、最後の曲はムソルグスキの『展覧会の絵』です。ロシア音楽の世界はとても自分に近いと感じています。

**A**：いままでの指揮者で好きな人はいますか？ あなたはトスカニニの再来と言われているそうですが。

**B**：トスカニニはもちろん好きです。トスカニニの音楽は

今聴いてもまったく古く感じません。録音を聴くと、まるで昨日演奏したのではないかと思うほどで、本当に驚異的です。フルトヴェングラー、フリッツ・ブッシュ、クレメンペラーも好きですが、やはり時代の色を感じます。最近はずっとコフスキーを再発見して、彼の音楽に魅せられています。独特なファンタジーがあり、カットしたり、自分の好きにやっていたと言いますか。でも音色に対するユニークな感性には凄いものがあると思います。大好きですよ。

**A**：今の指揮者ではどうですか？

**B**：リッカルド・ムーティとチョン・ミンフンの名前を挙げたいと思います。

**A**：これからの予定はいかがですか？

**B**：マリンスキー、モスクワ、ミュンヘンの予定があります。本当に旅ばかりしていますよ。

私はこの若きマエストロに大きな期待を寄せています。プラボ、マエストロ！ 次なるコンサート形式でのオペラ、待ってますね。

**● 対談を終えて**

対談を終えて数日後、アンドレアが

